

# 国家・社会「秩序」への挑戦

—— 大杉栄の思想 ——

岡 崎 正 道

## 序

大杉栄（1885-1923）は明治末期から大正期、日本の革命運動史上に大きな足跡を残した人物であり、その思想はアナキズムあるいはアナルコ・サンディカリズムという語で表すことができる。日本においてアナキストの典型と言えば大杉栄を挙げることに誰しも異論はなく、大杉を語ることはすなわち、日本アナキズムを語ることに言っても過言ではあるまい。

だが、それではアナキズムとは何かと言うことになると、その解答は必ずしも一様ではない。あらゆる権力と権威の否定と定義づけてみても、権力・権威の真体をどう捉え、何がゆえにこれを否定するかとなると、世に言うアナキストの間でも見解は多様に分れるはずである。何よりも固定的な定義づけによって一括りにすること自体、アナキストの最も嫌うところであり、それぞれの人物、思想家により様々なアナキズム像があり得るとするのが、まさにその面目であるからである。

本論では大杉栄の多面に亘る思想の中の、特に明治国家秩序とその擁護のイデオロギー、及び一般に大正デモクラシーと概括される思潮に対する大杉の批判と、大正末から昭和初期に日本の革命運動をリードすることになるマルクス主義とロシア革命の様況についての、大杉の評定を中心に考察してみたいと思う。

## 1. 秩序と反逆

大杉は短い生涯の中で、思想的に二つの大きな秩序と闘い続けたと言える。一つは言うまでもなく眼前にある明治国家という巨岩の如き「秩序」、そしてもう一つはロシア革命によって打ち立てられたボルシェビキの社会主義なる「秩序」。帝国主義と社会主義という一見相反する社会秩序に共存する権力支配の本質に切迫し、真の人間の解放と自立のために両者を共に否定するところに近代アナキズムの意義は存するのであり、それを体現するのが大杉の思想的営為であったというのは、至極常識的な把握の仕方ではあるのだが、このあたりの思念の様を彼の遺文の中に探ってみる。

1914年11月に著された小論に『秩序紊乱』というのがある。この中で大杉は、時の権力によって構築され維持される「秩序」の本質について、大胆な定義を試みる。

- (1) 人類の多数が、少数怠惰者の飽くなき貧婪と驕慢と痴情とを満足せしめんがために、刻苦して労働する。是れ即ち「秩序」である。
- (2) 人類の多数が、有らゆる奢侈品や必要品の堆く積みこまれたる倉庫の前に、或は餓死せんとし、或は凍死せんとする。是れ即ち「秩序」である。
- (3) 人類の多数が、男は機械の如く働き、女は大道に淫を鬻ぎ、子は栄養不良の為に斃る。

是れ即ち「秩序」である。

- (4) 雇主の貧慾なる怠慢の爲めに、或は機械の破裂や、或は瓦斯の爆発や、或は又土崩れや岩崩れの下に毎年数千万の生命を失ふ。是れ即ち「秩序」である。
- (5) 人と人との、国と国との、絶えざる戦争、海に山に、空に、轟く銃砲、田園の荒廢。幾世紀か間の幾多の膏血の累積より成る富の破壊。数万、数十万、若しくは数百万の若き生命の犠牲。是れ即ち「秩序」である。<sup>1)</sup>

このような富有階級による貧困者層の搾取は、資本主義の発展によって一層顕在化したという認識が当然基底にある。そして(5)の如く戦乱による被災は常に被支配者が蒙り、一部特権者の権益のための犠牲に供される。これらによって堅持される「秩序」とは、一体誰のためのものであるか。そして大杉は何よりも精神的圧迫、精神の自由の剥奪を以て、虚妄の「秩序」の根基と見る。

- (6) 而して遂に、鉄と鞭とによって維持される動機と感情と思想と行為との束縛。従って其の屈従。是れ即ち「秩序」である。<sup>2)</sup>

ではこうした「秩序」に対する「紊乱」とは如何なる謂であるか。以下の言説には、大杉の思想な重要な本質が表示されている。

- (1) 有らゆる鉄鎖と障碍物を破毀しつつ、更によりき現在と将来とを獲得せんが爲めに、此の堪ふ可からざる「秩序」に叛逆する。是れ即ち「秩序」の「紊乱」である。
- (2) 過去一切の祝聖されたる価値の顛覆。新しき思想と新しき事実との大胆な創造。是れ即ち「秩序」の「紊乱」である。
- (3) 彼の「秩序」の爲に殆んど死せんとし或は殆んど死すべかりし生命を、此の新しき思想と事実とに献げて、将来に來らんとする社会的大革命への道を拓く。是れ即ち「秩序」の「紊乱」である。

- (4) 真に自己の爲めなると同時に、又他の同類の爲めなる、最も美はしき激情の爆発。最も大いなる献身。最も崇高なる人道愛の発現。是れ即ち「秩序」の「紊乱」である。<sup>3)</sup>

(1)の言句は『共産党宣言』の「共産主義者は、彼らの目的は、既存の全社会組織を暴力的に転覆することによってのみ達成できることを、公然と宣言する…プロレタリアはこの革命によって鉄鎖のほかになうしなうなものもない<sup>4)</sup>」を連想させるが、ここでも単に経済的抑圧からの解放にとどまらず、何より新しい思想による旧来の価値意識の根本的転換をもって初めて、社会的創造が可能になるとの認識が示されている。

人類への「大いなる献身」と「人道愛の発現」のために、「美はしき激情の爆発」によって「秩序」の「紊乱」を敢行しなければならないというのは、主情的と言えれば確かに主情的な思念には違いない。そこでは、物質的な存在と観念の所産とを土台と上部構造というふうに分けし、基本的に後者が前者によって決定されるという唯物弁証法の定理は採られない。

人類の長い歴史は奴隷制から封建農奴制さらに資本主義の賃金奴隷制へと進展し、近代資本制の下では、資本家は労働者を雇用時の支度金ゼロで集めその後は彼とその家族の最低限の生存費用のみを給与すればよい点、ともかくも「購入」のための一時金を用意せねばならなかった奴隷労働制より一層安価で容易だとさえ資本家は考えている、というところまで大杉の認識は徹底しているが、しかしかかる状況を打破する方を彼は、生産力の発展による生産諸関係

1) 世界文庫、大杉栄全集、別巻、219～220頁。

2) 同前。

3) 同前、220～221頁。

4) 大月書店、国民文庫1、74頁。

との矛盾の激化—而して労働者階級の闘争の拡大といった経済的要件よりも、あえて人間の衝動的意識や本能的行為を駆動力とするところに求める。

本能は盲目だ。従って本能そのままの表現は多くの誤謬を伴ふに違ひない。けれども…かなりの誤謬は犯しつつも、猶多少の長い間これを続けて行く時には、やがて本能の行為そのものにアイデアが出て来る。…此の本能は久しい間秩序の名の下に圧へつけられていたが、やがて其の周囲に頹廢の空気が漲って来ると、それが直ちに…鋭敏な心に感染して、忽ちに又爆發し出す。<sup>5)</sup>

#### 〔『本能と創造』〕

自身もつとに表明する如く、ここには抽象的思考より具体的体験的な本能や直感を重視し、純粹異質性としての“持続”を強調するベルクソンの創造的進化、生の躍進 (élan vital) の哲学の示唆がある。

弁証法と唯物史観に立脚するマルクス主義の革命論では、賃金奴隷制を核基とする資本主義的抑圧からの人間の解放は、massとしての労働者階級の主として経済闘争の至要性に求められる。しかし大杉においては、人間の解放の要諦は物質的な条件の変革よりも、精神の解放即ち「奴隷根性」の克服が第一義とされている。

主人に喜ばれる、主人に盲従する、主人を崇拜する、これが全社会組織の暴力と恐怖との上に築かれた、原始時代からホンの近代に至るまでの、殆んど唯一の大道徳律であったのである。そしてこの道徳律が人類の脳髓の中に、容易に消え去る事の出来ない深い溝を穿って了った。服従を基礎とする今日の一切の道徳は、要するに此の奴隷根性のお名残りである…過去数万年或は数十万年の間、吾々人類の脳髓に刻み込まれた此の奴隷根性を消し去らしめる事は、中々に容易な事業ぢやない。けれども真に吾々が自由たらんが為めには、どうしても此の事業は完成しなければならぬ。<sup>6)</sup>

#### 〔『奴隷根性論』〕

道徳観念などを上部構造に含まれるイデオロギーと断案し、あくまで土台たる経済構造の変革を根本とする革命理論とは異なり、大杉はひたすら精神の自由の確立に固執する。ベルクソンらの哲学説の紹介・翻訳等を精力的に進めた彼の思想には、西洋の思潮のうち、精神と物質、主観と客観といった思考の枠組で世界を説明しようとする合理主義の哲学よりも、それらのフレームを取り払って生成・流動する生命に根源的現実を見出し、アプリアリな観念の構成を排除して、世界の直観的・情意的把握に重きをおく〈生の哲学〉など非合理主義的な思惟に触発された面が多分にあった。知的に受容されたものより、自身の実存の価値に依拠し、徹底した実存の解放に極度に執着する傾向が強い。あらゆる外的権威を否定して自我の神聖な価値を強烈に主張した、19世紀のヘーゲル左派の哲学者M. シュティルナーの個人主義に共鳴するところにも、その意識は現われている。

此の固定したる観念、此の幽霊的観念…社会とか道徳とか宗教とか国家とか称するものはスティルナアを以て云はしむれば、生きてる人の血を吸ふ…吸血鬼である。人は此の吸血鬼を其の心より逐ひ出しては了はざる限り、これに服従する事を拒絶せざる限り、其の自由を得られない…斯くして現存の一切の社会羈絆が断尽せられた時、其処に残るものは只だ各個人の自我…唯一者あるのみとなる。<sup>7)</sup>

5) 大杉栄全集、第1巻、329～330頁。

6) 大杉栄全集、第1巻、23～24頁。(以後「大杉栄全集」省略)

7) 第1巻、125頁。

(『唯一者—マクス・スティルナア論—』)

大杉にとって否定されるべき権威とは、単に権力によって樹立された政治的秩序と、これによる外的強制のみの謂ではない。それはすなわち生活体系・価値観等のすべてを含む社会構造の全体であり、何よりもこれを自明のものとして無意識のうちに受け入れてしまう人間の、呪縛されきった精神の骨組みこそ破碎されるべきである。政治や法律のみならず既成の道徳も宗教も教育も、すべて巧妙極まる支配と暴力の根源だからである。

社会は進歩した。したがって征服の方法も発達した。暴力と瞞着との方法は、ますます巧妙に組織立てられた。政治／法律／宗教／教育／道徳／軍隊／警察／裁判／議会／科学／哲学／文芸／其他一切の社会的諸制度!!<sup>8)</sup> (『征服の事実』)

大杉が生きた明治後半～大正期日本国民の精神の内奥を固く緊縛した、教育勸語をはじめとする天皇制イデオロギーや、彼自身の諸活動にも厳しい掣肘を加えた治安警察法等の諸制度・機構がまさに「組織的瞞着」(同前)の現実形態として眼前に存在する。「個人の権威の至上」(同前)を基に「憎悪美と反逆美(同)によるこれが転覆を叫号する大杉の情念は、実に「社会進化に於ける…叛逆本能」<sup>9)</sup>の発現にはかならない。彼自身認める如く、反逆者は「暗黒の上に投げられた光明の新しき光線が、伝習や旧習や怠惰やの調子を攪乱する」<sup>10)</sup>がゆえに「世間の虐待…罵詈」(同)を免れないが、それでも彼らこそ「生の運動の突如なる急迫、前進的躍進、将来への非歴史的飛躍」<sup>11)</sup>を果たす主体であり、その自覚こそが望ましき人間社会の創造を導くのである。

畢竟大杉にとって革命とは、旧体制を打倒して新体制を構築するという政治革命であるより、人類創世以来の「秩序」形成史に対する、自立した個々人による精神革命の謂であったと言える。政治革命なら有史以来幾度となく繰り返されてきたが、未だかつて人間の真の自由と解放を実現したためしが無い。だが、「自由と創造とはこれを将来にのみ吾々が憧憬すべき理想ではない。吾々は先づこれを現実の中に補捉し…吾々自身の中に獲得しなければならぬ」<sup>12)</sup>(『生の創造』)のである。いわゆる社会主義の革命論も「必然から自由への飛躍」、「外的強迫から内的発意への創造」を強調したのはよいが、これを革命の到達目標として設定し、本当はこれを革命の起点としなければならないことを忘れるという重大な誤謬を抱えてしまっている。「政府の形式を変へたり、憲法の条文を改めたりするのは何でも無い仕事である」<sup>13)</sup>(『奴隷根性論』)が、これでは単に人類史上幾たびも経験してきた政治革命の繰り返しにとどまると大杉は言う。この愚行に終止符を打つ最後の絶大なる大革命はすなわち、政治革命と経済革命とを併せた社会革命と共に文化革命の同時遂行でなければならない。

自立した個々人の全人格のエネルギーをもって断行される革命という捉え方は、ある意味では、個人の存在をプロレタリアなる社会的階級の中に解消しがちなマルクス主義の論理と背反するものである。大杉は労働組合の意義を強調し労働者の決起を促迫する場合にも、指令—受命の関係を生み出しやすい集権的団結の要をほとんど説かない。この“自由連合”論がやがてマルクス主義派との熾烈な抗争を惹起する経緯については後述するが、「社会的個人主義」なる造語にこめられた彼の社会と個人の関係の弁証法は、「成上り者のブルジョワジイ」が貴族

8) 第1巻, 31~32頁。

9) 第1巻, 171頁。

10) 第1巻, 172頁。

11) 第1巻, 173頁。

12) 第1巻, 55頁。

13) 第1巻, 24頁。

にとって代わっただけの「要するに大詐欺師のいかさま仕事」<sup>14)</sup>（『近代仏文学一面観』）と捉えられたフランス革命観を一つの根拠としている。それは持てる者の自由の実現であり、有産者にとっての個我の充足にすぎなかった。一方これを克服せんとする社会主義の論法は、貧困な労働者を革命の主体に据えるのはよいが、ともすれば彼らが旺盛な自我意識の発現により各自独立して「強者」の地位に上昇しようとする指向を、妨げる傾きがある。自由に思考し自由に行動する近代的自我とは、まさにニーチェの言うところの「彼岸に向ふ渴望の矢」<sup>15)</sup>（『生の創造』）である。大杉が「平民労働者の此の偉大な個人的及び社会的創造力…其の強烈な生活本能…の自由な奔放」<sup>16)</sup>（『民衆芸術の技巧』）を強説するのは、けだし各人の本能的行為の奔放な発現が決して共同体の存立を脅かさない、真正な個人と社会の調和のありようを確信していたからにはほかならない。

このあたりの思考は、大杉とも平民社等を通じて親交のあった北一輝の個人的利己心と社会的利己心の調和、「偏局的個人主義」から「純正社会主義」への進化という主張とも相通ずる性格を有している。北は1906年に著した『国体論及び純正社会主義』の中で、「社会の利益を終局目的とすると共に個人の權威を強烈に主張」<sup>17)</sup>するところに社会主義の真髓を見、「個人が社会の分子として社会其者たる以上は個人の目的は即ち社会の目的たるべきなり—社会主義は此意味に於て個人主義を継承す」<sup>18)</sup>と揚言する。「社会主義は全社会の驚くべき富有と個人の独立とを共に得べきことを確信す」<sup>19)</sup>という北の革命哲学は、経済的貴族たるブルジョアジーと社会的權威を壟断する政治支配者とを共に倒滅のターゲットとし、解放された平民労働者が真実社会の強者としてその個性を全面的に開花せしめ得る体制の樹立を想望する点で、大杉と相当に近似した思想的地平にあったと言えるのではないか。やがて「国家」の存在の極度の奔騰が「革命的大帝国主義」という想念を生み出し、天皇を旗標とする革命戦略を導くに至って、大杉のアナキズムとは対極に位置するようになるが、それでも鮮烈な個我の自立と解放への希求は、両者の思想の根本的発意の意外な近さを感じさせると共に、どちらも所謂左翼からも右翼からも違和感をもって敬遠もしくは嫌忌され、ついには兩人とも天皇制国家権力によって断罪されるに至る所以が見出されるように思えてならない。

## 2. 大正デモクラシーの虚妄

戦前日本の民主主義に果たした大正デモクラシーの意義は、今日かなり高く評価されていると言ってよい。

大正デモクラシー運動は、われわれが思い、想像するよりはるかに、広範かつ深刻に日本全土をゆるがした運動であった。それは明治の国家主義を根底より破壊し、新たな現実を導く強い力をもった…生活のあらゆる側面で、相当な改革の進展と民主化の契機が生まれたのである<sup>20)</sup>

14) 第1巻, 680頁。

15) 第1巻, 56頁。

16) 第1巻, 627~630頁。

17) みすず書房, 北一輝著作集, 第1巻, 120頁。

18) 同前, 121頁。

19) 同前, 58頁。

20) 鈴木正節『大正デモクラシーの群像』雄山閣, 1頁。

では大杉は、自らが思想的営為を展開したこの時代の思潮に対して、どのような認識と評価を行なっているであろうか。吉野作造や大山郁夫ら、大正デモクラシーをリードした人物を論評する彼の言説を検討することは、その絶対自由主義の特異性を浮きぼりにすると共に、かの民本主義や自由主義と呼ばれる当時の思想の内質と制約をも解明する端緒となるであろう。

1918年という年は、国内では米騒動・原政友会内閣の成立、欧州では第一次大戦の終結という大事件のあった重要な年であり、老社会・黎明会・新人会が結成されるなどして政治論議が百家争鳴の観を呈し始めた時期でもある。この年著した『民主主義の寂滅』で大杉は、時代のオピニオンリーダーたる知識人の底の浅さを次の如く揶揄している。

此頃の新聞雑誌の政治論に一転機が来たさうだ…学者先生の、謂はゆる科学的真実に基づく本物の政治論が興つて来たさうだ。政治論の動機が純化され、範囲が広められ、内容が深められたさうだ。そして皆んな揃ひも揃つて反政府的になつたさうだ…しかしだ、読んで見て実に驚く…到るところ曖昧だらけだ。矛盾だらけだ。支離滅裂だ。よくもこんな粗笨な頭を持たたものだと感心する位だ。疑はなくちやならん事は何に一つ疑つていない。知らなくちやならん事は何一つ知らない。そして、どうでもいい余計な事だけを…上つ面の事だけを、一生懸命になつてまづい頭で理屈つて行く、こね上げて行く。<sup>21)</sup>

逆巻く時代の矛盾と全霊をこめて格闘し、真理の所在を究明するところにこそ知識人の崇高な使命があるはずなのに、全く焦点のずれた知的遊戯に墮している「盲の学者先生」の現況は、ほとんど救い難いと大杉は冷笑する。『民主主義の寂滅』で吉野作造、同年の『民族国家主義の虚偽』で大山郁夫が、こうしたインテリの代表格として俎上に載せられるゆえんである。

では「大正デモクラシーの中心人物…今日の私どもがじっくりと学び直さねばならない深い英知と、日本の土壌における歴史形成の力が秘められている」<sup>22)</sup>と賛嘆される吉野の政治思想のどこに、大杉の非難の刃は向けられるのか、少しく彼の言を聞こう。

主権の所在と云へば、極くくだいて云へば、君主か民主かの事である。又、主権運用の方法と云へば、専制か立憲かの事である。(吉野)先生は此の主権の所在と云ふ事に就いては一言も説明しない。そして主権の所在に関する説明と云ふのが、政治の目的に関する主義と云ふ事に早変わりした…政治の目的と云ふ事には、何んの為めかと云ふ事と、何人の為めかと云ふ事とがある筈だ。然るに先生は、何んの為めかと云ふ方には一言半句も費さずに、直ちに何人の為めかと云ふ方に飛んで、しかも其の方をのみ説いている<sup>23)</sup>

主権の所在如何という純法理的な論題を一応棚上げにし、その運用による国民の利福の最大限の保証及び議会の機能の重視と世論の動向に対する十分な顧慮を図るとするのは、吉野にとって、あえて君主主権の明治国家体制との究極的対決を回避し(即ち「国体」否定の人民主権論という誹謗を避け)つつ、デモクラシーの果実を日本において可能な限り受益させるための苦肉の戦略であったろう。

大逆事件後の「冬の時代」の状況下で天皇主権という金科玉条にまで踏み込む冒険は、自由主義思想の枠内では到底不可能であり、「西欧デモクラシーと明治憲法を混血させることで、天皇制権力の専制支配体制を民主化の方向へ掘りくずそうとした」<sup>24)</sup>というのが吉野の政治思想の精一杯の“限界”であり、それでもそこには相当の意義を認め得るとというのが公平な見方

21) 第1巻, 557頁～558頁。

22) 武田清子, 「吉野作造<天皇制下のデモクラシー>」, 朝日新聞社『日本の思想家2』350頁。

23) 第1巻, 560頁。

24) 小山仁示, 「大正デモクラシーの統合と分極」, 有斐閣『近代日本社会思想史II』9頁。

でもあろう。現に天皇制絶対主義のイデオログたる憲法学者上杉慎吉の如きも、国民の精神的統合の方便としてあえて普通選挙制に賛同するような風潮さえあった中で、民本主義をいかに実質化するかに吉野の苦心は払われたのであり、天皇制との衝突を避ける現実的配慮とともに、「民本主義が、はたして思想の次元において、天皇主権という法的なたてまえを支えていた伝統的な思想構造とどこまで対決する強さをもっていたかという問題を、じつはわれわれの前に投げかけている」<sup>25)</sup> 真摯な姿勢も存在していたと思われるのである。吉野が『憲政の本義を説いてその有終の美をなすの途を論ず』の中で「民本主義は第一に政権運用の終局の目的は一般民衆のためということにあるべきを要求する…第二に民本主義は政権運用の終局の決定を一般民衆の意嚮に置くべきことを要求する」<sup>26)</sup> と宣明した上、「何が人民一般の利福なるかは人民彼自身が最もよくこれを判断し得る…少数者の政治は往々にして自家階級の利益の擁護に急なるのあまり、その地位を濫用して不当なる政治をなすの弊がある」<sup>27)</sup> と喝破し、また普選論の文脈の中で不正選挙に対する峻厳な取締りと政治倫理の浄化を高唱する<sup>28)</sup> くだりなど、真の民意に背戻した利益誘導を事とし、世論の指弾にも恬然として恥じぬ「戦後民主主義」の為政者たちに対する頂門の一針とさえ言いたいくらいである。

しかし大杉は、そのように好意的には評定しない。彼の吉野批判のポイントの一つは、「主権の所在」についての曖昧さ、すなわち人民主権を明断しないことへの憤懣であり、これは山川均などと共通の主張である。もう一点は、吉野は政治の目的を民衆の利益の擁護におくと言うけれど、それは個々人の自由と利福の尊重ではなく眼目は抽象化された「人民全体の利益」であり、詮ずるところ国家利益の保護にすり変えられてしまう危惧を多分に有するのではないかという強い疑念である。見せかけの民主主義はなし崩しに国家主義に転落するという懸念、すなわち「個人的自由」が「最大多数の最大幸福」へとすり変わり、「人民全体の為め」がやがて「国家の為め」へと奪胎を余儀なくされた<sup>29)</sup> という冷徹な洞察である。

なぜか。個人的自由の尊重と云ふ事を徹底的に進めて行けば、自然と、国家と云ふ強大な強制的組織を打ちこはすからだ。そして其の落ち行く先は無政府主義であるからだ。<sup>30)</sup> ここには、フランス革命の封建専制打破の成果が、近代ナショナリズムの進展の過程で国家目的への人民の動員＝手段視へと歪曲されていった歴史への、いたたまれぬほどの痛惜の感懐がある。

民主主義と云ふことを中心として考えれば、国家そのものに、及び此の国家の職掌とする政治そのものに、何等かの根本的疑問を抱かなくちゃならん筈だ。国家の実質に、政治の実質に、根本的考察を加へなくちゃならん筈だ。しかし…吉野先生は、斯くの如き疑問や考察に就いては全くの盲である。<sup>31)</sup>

吉野の国家観の根底には、封建専制から民主へと一市民革命を経て一発展してきた近代国家の制度的枠組に対する熱い信頼感がある。二高在学中に入信したキリスト教の深い信仰もあって、清教徒移民によるアメリカ建国を「一新自由境を開拓して神意の完全なる実現を期せんとの大抱負」<sup>32)</sup> と絶賛し、英米を議会制民主主義国の範型として位置づける発想は、国家を市民社会

25) 松本三之介、『近代日本の知的状況』中央公論社、150頁。

26) 筑摩書房、『現代日本思想大系3・民主主義』、209、217頁。

27) 同前、217頁。

28) 同前、239～243頁。

29) 第1巻、563頁。

30) 同前。

31) 同前。

32) 現代日本思想大系3、184頁。

における人民の生活を保全するための手段の価値であり、人民の不断のコントロールによって善用できると捉える機能的国家観とも言える。こうした国家観をいかにして天皇主権国家日本において最大限実質化させるかという点に、かの天皇機関説論者らの腐心があったわけで、無論吉野もその例外ではない。

一方大杉によれば、近代国家とは「大商工業者と称する新来の特権階級…が拠って以て自己の権勢を揮ふ、強大なる強制的組織」<sup>33)</sup>であり、封建割拠の時代以上に中央集権化された強制的権力の拡大によって「民主主義が益々向上発展して遂に涅槃に期した」<sup>34)</sup>という、極めてアイロニカルな認識がここから生れる。多数成員の意思と要求をくみ上げて現実化する国家機構への信頼という意識のあり方は、大杉にとって許し難い欺瞞である。個人的自由を徹底して実現させようとすれば、必然的に国家・政府との矛盾を招来する。この肝心な点を黙視する政治理論は、所詮御用学にすぎない。

吉野先生は個人的自由を徹底的に進めれば無政府主義になるから悪いと云ふ。しかし、先生は無政府主義がなぜ悪いかと云ふ事に就いては一言も云はない。無政府主義は政治学にとっては先天的に罪悪であるからだ…それで科学的政治学だなんてべらぼうにも程がある。<sup>35)</sup>人間社会の予定調和を信じ、人類の歴史の漸進的向上に期待をかけた吉野に対し、大杉は、現実の社会的諸関係の中に無前提に諒とすべきものはないという確信を抱持していた。「信者の如くに行動しつつ、懷疑者の如くに思索する」<sup>36)</sup>という含蓄に富む言葉は、その信念を語っている。

ややアナロジカルな言い方をすれば、吉野らを領袖とする黎明会流の「民本主義」に、個人の自由の無限的価値を「国家主義」の領内に囲い込んでしまう、小ブルデモクラットの致命的限界を看取する大杉の位相は、「戦後民主主義」を自賛する知識人たちの精神の虚妄を激しく攻撃した、所謂新左翼の情念を彷彿させるものがある。

知識人の存在は…本質的には寄生階級でしかない…その役割もまたネガティブものでなければならぬ。絶えざる体制への批判…自己の存在の責任からなされる強烈な批判が必須である…体制内の牙城を客観的に防衛するような…「進歩的知識人」はすべて破産したと言える<sup>37)</sup>

「体制内の牙城」の界域内での“革新”の不毛性を、明治国家の「立憲」体制下でのブルジョア支配の是認を前提とした改良・改革の提唱に対する批判に比擬してみれば、戦後日本における「進歩的知識人」と大正デモクラシー期の吉野らの位置が、類似的な存在として浮かび上がってくる。やや牽強附会に過ぎるかもしれぬが、大杉の意識は実に半世紀後の世界的な若者の反乱の先唱、「一九六八年、フランス五月革命で…高らかに叫んだ青年たちを先駆けるもの」<sup>38)</sup>であったとも言えよう。

大杉の民本主義＝国家主義の仮象という見方は、大山郁夫を厳しく弾劾した『民族国家主義の虚偽』を検討することで一段と鮮明になる。

大山の「民族国家主義」の主旨を、大杉は次の如く約言する。まず民族は人種や種族のような血族共同体ではなく、国家とも一致しない。民族のシンボルは、何より共同の文化と伝統、

33) 第1巻, 566頁。

34) 同前。

35) 同前, 568頁。

36) 『社会的理想論』, 第2巻, 628頁。

37) 東大闘争全学共闘会議編, 『果てしなき進撃』, 三一書房, 127頁。

38) 大沢正道, 筑摩書房, 近代日本思想大系20, 『大杉栄集』解説, 426頁。



歴史に対する感情であり、それは流動的な歴史的・社会的所産である。従って「民族主義」とはこの共同の文化・伝統・歴史を紐帯とする精神の謂であり、民族国家主義はこれを護持せんとする実在の人格的存在である。かつ民族の精神的統一を破却する外敵及び圧政に抵抗する意識において、それは民主主義の究極理念と合致するものでもある。そして大山は、民族国家主義の進展が現代世界の動かし難い趨勢であるとして、これを民主主義の進歩と並置しようとする。

大山の民族主義評価は、帝国主義列強の争覇という現実世界における民族自立のナショナリズムの意義を認めるものとみなし得る反面、日清・日露戦役等を経て極東の帝国主義国家へ飛躍した日本の対外進出をも正当化する危険性を併せ持っている。大杉の批判の矛先はまず、大山が民族国家内部の「社会的征服」すなわち特権者による人民への抑圧を非としながら、所謂大和民族の「熊襲・蝦夷」征討を肯定し、近年の台湾・朝鮮支配をも是認する点に向けられる。こうした植民地支配の悪弊を剔抉することなく、「民族的融和」の詭弁で粉飾する欺瞞に對してである。

僕等は日本歴史を学んで、上古の歴代の天皇が、如何に武力と策略とで、熊襲や蝦夷の征服に其の全力を尽したかを知った。僕等は其処に熊襲や蝦夷の本然の心理的必要から起った叛逆の連鎖を見た。<sup>39)</sup>

この論文が著されたのは1918年4月だが、翌年には朝鮮で3・1独立運動が起こり、大杉没後の1930年には台湾で霧社事件が勃発する。大山が言う共同の文化・伝統・感情等は、実は「過去及び将来の民族的征服を承認する為の一伏線」<sup>40)</sup> にすぎず、現実の民族国家主義は「ニコニコ面のおかめの面を脱いで、恐しい牙をむき出した般若の実相」<sup>41)</sup> をさらけ出した、侵略的帝国主義の異名にほかならない。民族なる共同幻想を實體視する大山の発想は、いかに民主主義追求の装いをこらそうとしても、畢竟階級的専制支配を隠蔽するイデオロギーの役回りに墮せざるを得ないと大杉は言いたいのである。

此の瞞着手段が最も巧妙に、且つ最も組織的に行はれたのは、謂はゆる国民教育であった。国民教育とは、要するに、被征服階級をして征服階級との共同の文化、共同の伝統、共同の歴史を有するが如く妄想させて、共同の追憶と共同の栄辱感情とを強制するものである。<sup>42)</sup> この年(1918年)大山郁夫は早稲田大学教授を辞して大阪朝日の論説委員となり、寺内内閣によるシベリア干涉出兵を批判するなど活動したが、まもなく鳥居素川の白虹筆禍事件に抗して退社、次いで吉野や福田徳らと黎明会を創立する。後早大に復職、護憲運動に尽力するとともに労働農民党や労農党の領袖として活躍、合法左翼の“輝ける委員長”と評された人物である。こうした大山の思想的理念を、大杉とて全く認めないわけではない。

大山君の本当の精神は此の被征服階級の共同伝統の恢復である。殊には専制主義の遺物たる謂はゆる官僚政治の下に蹂躪されている民衆の共同伝統の恢復である。そこで大山君の主張は、此の精神に従って、官僚政治に對抗する民衆政治となる。<sup>43)</sup>

天皇制を胸壁とする官僚独裁の圧政を打破する思想的可能性を部分的には認めながらも、大杉は大山が終局的には国家権力に阿諛・迎合して、民族国家主義の主観的妄想に埋没してしまう

39) 第1巻、576頁。

40) 同前。

41) 同前。

42) 同前、580頁。

43) 同前、581頁。

点を甚だ遺憾視するのである。大山のみならず、こうした「いかさま自由主義…本当のデモのクライシ」<sup>44)</sup>という瞞着を脱却できない宿弊を民本主義者の言動のうちに看取して、痛憤を禁じ得なかったのである。

### 3. ロシア革命の功罪

冬の時代の逆風をひたすら耐え忍んでいた社会主義者たちにとって、1917年のロシア革命はまさしく天啓であった。山川均は「受けた影響は、生涯のうちでも最も大きな影響だ」<sup>45)</sup>と述懐している。山川ら後に「ボル派」を形成し日本共産党結成に参加していく人々は、概ねロシア革命を歴史的偉業と賞揚し、鈴木文治ら友愛会—総同盟の右派の指導者たちは反共社民主義を掲げ、労資協調路線に則って、この革命の過激思想が会員の暴走の呼び水となることを懸念していた。では大杉はどうであろうか。彼もロシア革命の人類史的意義それ自体は、決して否定しない。

ロシア革命は資本主義制度を転覆した最初の社会革命だ。世界の労働者はそれによって非常な勇気を鼓舞されて、其の思想や行動の上に非常な影響を与えられた。これは動かす事の出来ない事実だ。何人もそれを否む事は出来ない。僕等自身も、此の非常に鼓舞され、影響されたものの一人だ。<sup>46)</sup>

(『無政府主義者の見たロシア革命』)

しかし、と大杉は続ける。さればとてこのロシア革命すなわちボルシェビキにより主導された革命の展開を、無条件に讃えることはどうしてもできないと。

ケレンスキイの民主政府を倒した十月革命は、主として『革命は如何にして為されなければならないか』を僕等に教へた。そしてそれ以来の謂はゆるボルシェビキ革命の進行は、主として『革命は如何にして為されてはいけぬか』を僕等に教へた。<sup>47)</sup>

この逆説的言辭に、大杉のロシア革命観が凝縮されている。「あらゆる収奪、あらゆる抑圧、あらゆる不正から働く人民全体を解放する」<sup>48)</sup>崇高な目標を目指したはずのロシア社会主義革命が、“すべての権力をソビエトへ”(レーニン『四月テーゼ』)というスローガンにこめられた理念を徐々に喪失し、やがてボルシェビキ政府による一反革命干渉に対する防遏を口実とした一人民への新たな抑圧を生み出す反転のプロセスの象徴を、大杉は無政府主義者の運動に対する苛虐な弾圧の累積に見た。

旧体制を倒して新権力が樹立される時、変革の一層の徹底、さらなる継続を唱導し実践を企てる最急進派は、必ず革命権力の手による苛酷な圧迫で解体もしくは摺伏を余儀なくされる。古くは宗教改革・ドイツ農民戦争のミュンツァーラ再洗礼派、イギリス清教徒革命におけるウィンスタンリーらの真正水平派(ディガーズ)、フランス革命時のパブーフら平等派、普仏戦争後のパリコミューン、第一次大戦後のドイツ革命におけるルクセンブルクらのスバルタクス団、日本でも明治維新時の赤報隊や民権運動期の秩父困民党など、枚挙に遑がない。こうした革命

44) 同前, 580頁。

45) 岩波書店, 『山川均自伝』, 370頁。

46) 第2巻, 367頁。

47) 同前。

48) レーニン, 『貧農に訴える』, 中央公論社, 世界の名著52, 96頁。

の非情な宿命をソビエト・ロシアに当てはめるなら、その悲劇的な生贄はアナキストたちであったと言ってよい。

「ロシアのパリ・コムユン」<sup>49)</sup>とも言うべきクロンシュタット軍港の水兵反乱、「自主自治な自由ソビエトの平和な組織者であると共に、其の自由を侵さうとする有らゆる敵に対する勇敢なパルティザン」<sup>50)</sup>の雄ネストル・マフノーの闘争は、ロシア革命を人民の真の自由と解放へ導かんとするアナキスティックな色彩濃厚な運動であったが、ついにトロツキーらソビエト赤軍の武力で圧殺された。また革命当初レーニンも支持していた企業の労働者自治管理のシステムは、徐々に党と国家の権力によって骨抜きにされ瓦解する。後のスターリン独裁体制の萌芽とも言うべき党の物神化、官僚統制の強化に抗したアナキストの行動はことごとく封殺された。

深い幻滅と憂念のうちに沈黙を守ったクロボトキンや、ロシアを脱出して世界にソビエト政権の非道を訴えたエマゴールドマン、ベルクマンらの文書を紹介する形で、大杉はロシア革命への絶望的な認識を披瀝する。

ロシアに於ける革命的諸分子の迫害は、ボルシェビキの政治的及び経済的政策の変化と共に…益々強烈に、益々決定的になった…ロシアに於ける有らゆる革命的分子の中で、今最も残忍なそして組織的の迫害を受けているのは無政府主義者である…共産党政府が資本主義世界と妥協する事の大きくなるだけ、それだけの無政府主義に対する迫害が甚だしくなる…無政府主義的傾向に対するレーニンの奮闘は実に残忍極まるアジア的退治の方法を取った…拘禁された無政府主義者の中の十名が『強盗として』射殺された…世界の革命的労働運動は、ボルシェビキ政府が有らゆる政治上の異説者に対して加へているところの、血と殺人との制度をもう知ってもいい時だ。<sup>51)</sup>（『ソビエト政府、無政府主義者を銃殺す』）

罪状の捏造までして反対分子を抑圧し抹殺するボルシェビキの蛮行に対し、革命初期はあまり言及しなかった大杉も俄然激しくこれを非難するようになる。アナキスト仲間の高尾平兵衛からの「進行中の革命を擁護し、これに助力を惜まぬ者こそ真の無産階級の友である」<sup>52)</sup>のに、ロシア革命非難は利敵行為ではないかという問いかけに対し、大杉は返答する。

最初僕は誤ってボルシェビキとの協同の可能を信じて、それを実行して、そして見事に彼等から背負投げを食はされた…ボルシェビキ政府に対する批評／僕はそれを随分長い間遠慮していた…が、真相はだんだんに知れて来た。労農政府…それ自身が、革命の進行を妨げる最も有力な反革命的要素である事すらが分った。ロシア革命は誰れでも助ける。が、そんなボルシェビキ政府を誰れが助けるもんか。<sup>53)</sup>

共産党が唯一無比の前衛党であるという自認と、にもかかわらず他党派・他勢力との協同戦線が不可欠という現実分析とは矛盾しないのか。共産党の戦略をめぐっての今日に至るもなおやまぬ論題が、ここに提示されよう。この点に関し大杉は、トロツキーの協同戦線論の主張に論及しつつ、「共産党の先生らはそこがわが党の特徴で、党利と無産階級の階級利とがぴったりと一致するからだ、なぞといい気になるのだろうが」<sup>54)</sup>と痛烈に皮肉り、共産党の実力が微弱な場合は力ある大衆運動団体の中に食い込んで、そこでの勢力扶植に努め、共産党がかなりの

49) 『革命の裏切者』、第2巻、416頁。

50) 『無政府主義將軍ネストル・マフノー』第2巻、451頁。

51) 第2巻、385～390頁。

52) 『何故進行中の革命を擁護しないのか』、第2巻、474頁。

53) 同前、480～481頁。

54) 同前、484～485頁。

強力な組織となった段階では、労働者階級の協同戦線の緊要性を呼号してその牛耳を執ろうとし、而して共産党がほぼ唯一の政治勢力となりおおせた国においては、独裁の権力を縦横に駆使して反対派の掃討に狂奔するという冷徹な見解を示し、次の如く結ぶ。

共産党の他の先生等がどんなに其の協同戦線論を美辞麗句で飾らうとも、僕はもうこれ以上に彼等の言葉を聞く必要はない。協同戦線は…飽くまでも労働者自身の必要として進めて行かなければならない…共産党の党利の上からの利用などは御免だ。日本の本当の自覚した労働者は、そんな協同戦線は真平御免だ。<sup>55)</sup>

かくの如くアナキストと共産党との協同戦線、連合が實際上あり得ないことを、大杉はロシア革命の冷厳な観察を通して悟ったわけだが、事は階級闘争—プロレタリア独裁というマルクス・レーニン主義革命理論の根幹についての、アナキストの立場からの評価に関わってくる。

人類の歴史は階級闘争の歴史であるというのは、マルクスの著名な定言である。古代奴隷制—中世封建制（農奴制）—近代資本制（賃金奴隷制）という社会体制の歴史的変転の根底には、発達せる生産力と既存の生産関係との矛盾によって生み出される支配階級と被支配階級の非和解的闘争が存在するという、周知の史的唯物論である。このシェーマによれば、現今の資本主義体制下では、財富と権力のほとんどを占有する資本家（ブルジョアジー）と大多数を占める貧困な労働者（プロレタリアート）の両階級の絶対不可避の対立が高まり、やがて極度に発展した資本主義国に過剰生産を動因とする大恐慌が起こる。而してそれが起爆剤となって、資本制社会における特権的負の歴史主体たるプロレタリアートを担い手とする社会主義革命が勃発し、資本家階級の支配は倒壊する。かくして人民の抑圧と搾取からの解放は進み、ついには全体と個の真の統一が回復され、人間の自由と平等が完全に実現された理想の社会が誕生する—ここで人類の前史は終る—という遠大な歴史的予見が提示されるわけである。

だが現実の世界近代史はこの定式とは裏腹に、先進資本主義国における共産革命の不成就という結果をもたらした。第一次大戦以後のドイツや1930年代の世界恐慌時にも、それは起こらなかった。むしろ先進国においては、国家財政による恐慌の克服を説く“ケインズ革命”が一定の成果をおさめて第二次大戦後の「福祉国家」政策を生み出したり、穏健な社会民主主義の改革理念が力を得て共産革命論を後方へ追いやり、共産党自体が「修正主義」路線に変貌したりするケースが目立つこととなる。

もとよりそれらの背景や要因は複雑であり、国によって事情も相当異なるが、一つ確かだと思われるのは「プロレタリアート」という概念の抽象性ではなかろうか。階級闘争史観においてはプロレタリアートという術語が頻用かつ重用され、それがあたかも現存の労働者階級の実体と同値であるかの如き錯視が見られるが、そもこの概念は、マルクスが活動した1850年代当時の現実の都市労働者の様況から経験的に帰納されたものであるより、むしろヘーゲル弁証法の少なからぬ示唆のもと人倫の喪失態として先験的に構成された、形而上学的抽象概念である傾きが濃いものである。英国をはじめ先進国のその後の歴史の進展が必ずしも労働者の絶対的窮乏を招来せず、改良主義的施策のある程度の効果等もあって彼らの生活条件が多少とも向上するに伴い、絶対非和解の死活的闘争の必要性は漸次弱まり、マルクス主義の先進資本主義国革命論としての非妥当性が指摘されるようになる。ここに至ってマルクス主義革命論は、資本主義の発達度も市民社会の成熟度も低いロシアなど後発の資本主義国家における、レーニン主義として衣裳替えを余儀なくされることになったと言えるだろう。

「労働者は祖国をもたない」<sup>56)</sup> というテーゼのもと「全プロレタリアートの共通の、国籍に

55) 同前, 488~489頁。

56) 『共産党宣言』, 大月書店, 国民文庫1, 52頁。

左右されない利益を強調し、おしつらぬく」<sup>57)</sup> ところに共産主義者の枢要な使命を見出したマルクス・エンゲルスの意識においては、ブルジョア独裁体制の覆滅の果てに、国家権力の否定された「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件となるような一つの協同社会」<sup>58)</sup> が想定され、国家自体が「最後に実際に全社会の代表者になることによって、自分自身をよけいなものにする」<sup>59)</sup> 段階に至って、ついにそれが死滅するという究極的な見通しが描かれている。またエンゲルスはベーベル宛書簡で、プロシア国家への伏拝を辞さぬラサール派の「自由国家」(即ち国民に対し「自由」であるような専制国家)論を糾弾した文脈の中で、自分たち共産主義者が説く「自由な人民国家」とは「社会主義的社会秩序が実現されるとともに…おのずから解体し消滅する」ものであるにすぎないと明言しているにもかかわらず、遺憾にも「無政府主義者からあきあきするほど攻撃されてきた」と嘆じ、国家はあくまでも革命成就のための方便たる「一時的な制度にすぎない」のだから、今後は「国家というかわりに、どこでも共同社会(Gemeinwesen)ということばをつかう」よう「提議」するとまで述べている<sup>60)</sup> ように、マルクス・エンゲルスの想念には、反国家のコミュン主義が貫流していたと考えられる。

マルクス・エンゲルスの場合、ウィーン体制打倒の諸革命とその後の自由主義の展開の下、国家権力がやがて揚棄されていく可能性についてのある種オプティミスティックな観測も持ち得たが、一方牢固たる専制国家ロシアにおける困難極まる闘争をリードする使命を帯びたレーニンにおいては、かように国家の権力悪に対する楽観的な意識は、容易に抱くことができなかつたと見るべきであろう。

『国家と革命』の中でレーニンはマルクス・エンゲルスの理論を援用しつつ、国家の本質と来たるべき革命の戦略とに関し、次の如く叙述している。

- (1) 国家は階級対立の非和解性の産物であり、その現われである。国家は階級対立が客観的に和解させることができないところに、またそのときに、その限りで発生する。<sup>61)</sup>
- (2) (マルクスによれば) 国家は階級支配の機関であり、一階級が他の階級を抑圧する機関であり、階級の衝突を緩和させながら、この抑圧を公認し強固なものにする「秩序」を創出することである。<sup>62)</sup>
- (3) 国家が階級対立の非和解性の産物であるなら…被抑圧階級の解放は、暴力革命なしには不可能なばかりでなく、さらに、支配階級によってつくりだされ、この「疎外」を体現している国家権力機関を破壊することなしには不可能である。<sup>63)</sup>
- (4) プロレタリア国家のブルジョア国家との交替は、暴力革命なしには不可能である。プロレタリア国家の廃絶、すなわちあらゆる国家の廃絶は「死滅」の道による以外には不可能である。<sup>64)</sup>
- (5) 階級闘争の承認をプロレタリアートの独裁の承認に拡張する人だけが、マルクス主義者である…つぎに一階級の独裁はあらゆる階級社会一般にだけ必要なのではなく…資本主義と「無階級社会」共産主義とをへだてる歴史的時期全体にも、必要だということを理解した人だけ

57) 同前, 44頁。

58) 同前, 56頁。

59) 『空想から科学へ』, 大月書店, 国民文庫2, 108頁。

60) 『ゴータ綱領にかんするエンゲルスの手紙』, 大月書店, 国民文庫15, 53, 54頁。

61) 大月書店, 国民文庫102, 16頁。

62) 同前, 16頁。

63) 同前, 17~18頁。

64) 同前, 34頁。

が、マルクスの国家学説の本質を会得したものである…資本主義から共産主義への移行は、もちろん、きわめて多数のさまざまな政治形態をもたらさざるをえないが、しかしそのさい、本質は不可避的にただ一つ、プロレタリアートの独裁であろう。<sup>65)</sup>

(6) 民主的共和制は…不可避的に階級闘争のいちじるしい拡大、展開、露出、激化をもたらすので、いったん被抑圧大衆の根本的利益を満足させる可能性が生じるやいなや、この可能性は、かならずまたもつばら、プロレタリアートの独裁によって、プロレタリアートによる被抑圧大衆の指導によって実現される。<sup>66)</sup>

(7) プロレタリアートの独裁、すなわち抑圧者を抑圧するために被抑圧者の前衛を支配階級に組織することは、民主主義の拡大をもたらすだけではない。プロレタリアートの独裁は民主主義を大幅に拡大し、民主主義ははじめて富者のための民主主義ではなしに、貧者のための民主主義、人民のための民主主義になるが、これと同時に、プロレタリアートの独裁は、抑圧者、搾取者、資本家にたいして…抑圧しなければならないし、彼らの反抗の力をもって打ち砕かなければならない。一抑圧のあるところ、暴力のあるところに、自由はなく、民主主義はないことは、明らかである。<sup>67)</sup>

問題の核心は、ブルジョア独裁の資本主義体制を倒して後、自由の王国たる共産制社会を現出するに至るまでの中間段階＝過渡期におけるプロレタリア独裁の意義及びその認否という一点であろう。プロレタリア独裁の趣旨は、旧体制における被抑圧者であったプロレタリア階級が、かつての抑圧者であり今後も有害な反革命勢力となり得る旧ブルジョア階級に対して行使する「抑圧」であり、全く正当にして不可欠な行為であるとされる。だが先記の(6)(7)にある如く「被抑圧者の前衛」を新たな「支配階級」として組織し、その前衛＝共産党による指導で大衆の「根本的利益の満足」が間違いなく達成されると断言できるであろうか。そしてそのことが「民主主義の大幅な拡大」であり、ブルジョア社会における「民主的共和制」の限界を克服した、「はじめての人民のための民主主義」の実現であると言いきれるのか。筆者もやはりこの点に、大きな疑念を禁じ得ない。

レーニンは、残存するブルジョア勢力の反抗を抑止するための方術としてプロ独の不可避を強説するが、ここでいうプロレタリアートとは決して現存の労働者階級と等値ではなく—そもそも資本主義未発達ロシアでは産業労働者はマジョリティではなかった—、革命を導く神聖な使徒として指定された抽象概念ではなかったか。なればこそ、圧倒的多数を占める住民大衆(大部分は農民)も資本主義の「鉄鎖」から解き放たれたとはいえ、依然方途に迷う無知蒙昧な集団的存在であるに相違はなく、これを適切に時に強圧的に教導することこそ、プロレタリアートの前衛たる革命戦士が担う崇高な任務であるという、強烈にして傲慢な信念が抱かれていたと言えるのではないだろうか。プロレタリアート独裁とは、新たなエリート権力集団たる共産党による人民の管理・統制の謂であり、ひいては特権的官僚の専制支配を準備するものにはかならないという批判は、レーニン存命中からあった。

クロボトキンは悲痛な言葉で、進行中のロシア革命を告発する。

大きな革命の波でもって前方へ押されて行ったボルシェビキは、最初は極端な革命的喊声で民衆の声を聳てさしていた。そして彼等は民衆や戦闘的革命家等の支持を得ていた。が、もう十月革命の時には、ボルシェビキは彼等の独裁を築きあげる事のために、革命の利益を犠

65) 同前, 47~49頁。

66) 同前, 91~92頁。

67) 同前, 113頁。

牲にし始めていた…ボルシェビキの圧制に対するロシア民衆の頑強な抵抗は、其の最もいい証拠だ。権力の為めに進んで行くボルシェビキは、彼等自身が主張する如き、革命の前衛では決してなかった。彼等は、反対に、民衆の力の上に上潮をおしとどめる堰だった。ただ独裁のみが革命を指導し保護すると云ふ其の固定観念でもって、彼等は現に今革命を押しつぶしつつあるところの其の恐ろしい国家を強大にして行った。<sup>68)</sup>

(『ボルシェビキの暴政』)

物象化や自己疎外の超克による人間性の解放こそ、本来のマルクス主義の至要な課題であり、レーニンが革命的实践を通じてこの課題に答えようとしたはずである。しかし生身の欲望や感情を持つ人間の集団が権力の争奪に明け暮れるとき、こうした初念は往々にして歪められ、時に目的と手段の倒錯が起こるのも全能者ならぬ人間の行ないなるがゆえの業果であると言えば、いささか非論理的にすぎようか。いずれにせよ、ロシア革命のその後の展開は農業の強引な集団化と農民層の圧迫、発展段階を無視した計画経済の強行的導入、党主流派に背いた「反革命」分子への残忍な粛清の断行というふうには、革命権力の冷酷さを露呈しつつ進行し、コミンテルンを通して各国の共産党は「指導」され操縦され、忠誠を競い合っていく。アナ・ボル論争に勝利した後のボル派—日本共産党も、ソ連党への無批判な追従ゆえに事大主義的偏向を免れず、結果的にファシズムの台頭を許す一因をも形成してしまう。

新経済政策（NEP）に危険な国家資本主義への反転の臭気を感じ得る大杉は言う。

労働者も又其の組合も、其の従事する工業には何等直接の参与を許されない…かくして新経済政策は、ロシアの無産階級のために賃銀奴隷の鎖を鑄て、他の資本主義諸国の労働状態よりもっと悪い状態の中に陥れて了った…共産党の首領等…はロシア無産階級の最善の利益を無視して労働者を最悪の奴隷にしてふ…ボルシェビキ国家は残忍極まり、共産党は陰険極まる。しかし此の残忍も陰険もロシアの労働問題を解決しはしないだろう。ロシアの無産階級と其の国家的及び私人的資本主義との間の闘争は猶進行しつつある…歴史的必然は、ロシアの労働者や農民の革命的経験と戦闘的精神とに助けられて、其の最後の結論を語るであろう。<sup>69)</sup>

(『労農ロシアの新労働運動』)

大杉没後の歴史の展開、すなわちスターリンによる独裁と国際共産主義運動の翻弄、ファシズムの猖獗と世界戦争の拡大への抵抗軸となりきれぬ左翼の非力という「最後の結論」をもし見ることができたなら、大杉はおそらくその根因を、個としての人民の無限の創造力や自由自治の精神を真に生かし得ない、集権主義の宿弊にあると断じたのではあるまいか。

そもそもロシア革命は、いかにプロレタリア社会主義革命を標榜しようとも、実際は封建地主の圧政に対する農民の土地奪取の素望を抜きにしては成功はあり得なかった。ケレンスキー臨時政権を倒して成立するボルシェビキ政府は、革命陣営の内に労働者と農民の階級的矛盾を抱え込んでいたと言える。プロレタリアの指導部を自認する党権力が農民層への抑圧を強化し、それを過渡期のやむを得ざる独裁と強弁するのも、この革命の秘められた性格を物語っている。レーニンは一般理論として革命後のプロレタリア国家死滅の必然性を繰り返しながら、現実はその「死滅」の時期については明言を拒む。

われわれは、国家は不可避的に死滅すると言うにとどめて、この過程が長期にわたること、それが共産主義の高い段階の発展速度にかかっていることを強調し、死滅の期限や死滅の具

68) 第2巻, 557~563頁。

69) 第2巻, 601~604頁。

体的形態の問題は、まったく未解決のままにしておくことが至当である。<sup>70)</sup>そして国家死滅と共産主義の高次の段階に到達するまでの間は、「社会と国家のきわめて嚴重な統制」<sup>71)</sup>が行なわれるという。さらに人類史上奴隸制・農奴制・賃金奴隸制の下では「きわめて狂暴で残忍」な抑圧と「血の海」が存在する<sup>72)</sup>が、社会主義革命後の過渡的な国家(半国家)においては多数者が少数者(旧搾取者)を抑圧する機能が残存するのみであり、「容易で、簡単で、自然…わずかな流血、はるかに少ない犠牲」<sup>73)</sup>で事が済むと確言する。厳しい統制の不可欠さと最小限の抑圧という楽観論と一矛盾する言辭も、革命政權樹立前の多分に抽象論なるがゆえのことである。非実体的な「人民」による人間の解放、国家の死滅という展望は存外、科学的社会主義者が忌避した空想的理念の域を出なかったのではないだろうか。

少なくともソビエト共産党と官僚による「きわめて残忍」な抑圧と「血の海」の大粛清という歴史事実を知る現代の我々は、今こそ謙虚に大杉らアナキストによるロシア革命弾劾の真旨に耳を傾けるべきであろう。

#### 4. 大正期革命運動の展開と大杉栄

— むすびにかえて —

河上徹太郎は大杉を評して、「彼は時のアナキストがそうであったように、ロマンティストであった」<sup>74)</sup>と書いている。「理想家」、「直接行動主義」者、「実行力と人柄の魅力を持った実家」であった<sup>75)</sup>とも言う。評価の当否は措くとしても、彼の革命運動における事歴とその役割のうちに、そうした傾向を探ってみよう。

横死の前年、大杉は『マルクスとバクウニン—社会主義と無政府主義—』という文章の中で次のように述べている。

どこの資本主義国家にでも、社会主義者や無政府主義者は、いつも気遣ひだとか、強盗だとか人殺しだとか、又は其の国家自身が使っているスパイだとか、宣伝される。其の敵の人格を民衆に疑はせるのは、政府にとって一番有効な方法だからだ。ところが、此の政府的方法は、更に社会主義者によっても、いつも其の敵の無政府主義者に用ひられる。しかも社会主義者は、資本主義者よりももっと…悪辣に此の方法を用ひる…此の方法は又、最近日本のボルシェビキ共によっても、全力的に其の旧同志の無政府主義者に向けられている。<sup>76)</sup>

社会主義者・ボルシェビキ派に対する大杉の、かくも激しい憤怒はいかなるゆえであろうか。彼はボル派の行為を、反共右翼団体の大日本国粋会や大和民労会等の「草賊」より有害だとまで非難するが、彼自身も認める如く従来は「同志」であった社会主義者と無政府主義者の、抜きさしならぬ確執はどこから生じたのか。古くは、大杉に強い影響を与えた幸徳秋水が米国より帰国後無政府主義と直接行動論を呼号し、片山潜・田添鉄二・西川光二郎ら議會重視派と対立した事実もあるが、やはり焦点はロシア革命勃発後のアナ・ボル論争に求められよう。「日

70) 前掲, 122頁。

71) 同前, 123頁。

72) 同前, 115頁。

73) 同前。

74) 新潮社, 『日本のアウトサイダー』, 156頁。

75) 同前, 156~157頁。

76) 第2巻, 315頁。



本の労働運動にとって波瀾重畳の激動期<sup>77)</sup>だった1919年より数年間の動静は、実に近代日本革命運動史の分水嶺であったかもしれない。

大逆事件後屏息を強いられていた労働運動・社会主義運動は、大正初年鈴木文治を代表とする労働団体友愛会の創立によって、再起の一步をふみ出した。同年大杉は荒畑寒村と共に『近代思想』を創刊、「沈黙雌伏を強いられていた…運動史上の暗黒時代」に「微かながら初めて公然と」声を上げた。<sup>78)</sup> さらに1913年にはサンディカリズム研究会を開始、14年『平民新聞』創刊、15年には平民講演会を始めるなど、年々組織を拡大していく友愛会の改良主義・労資協調主義に反対する立場で活動を展開した。そこには「生の拡充」の本能に基く反逆的意志と、自立した労働者個々人の闘争という視点が貫かれており、バクーニン・クロボトキンらの影響のもとにアナルコ・サンディカリズムの思想が抱持されていた。

友愛会も徐々に協調融和主義の性格を改め、ストライキをもって資本家と争う姿勢を示すとともに、19年には大日本労働総同盟友愛会と改称、理事合議制・労働非商品の原則・組合の自由・最低賃金制の確立・八時間労働制・普通選挙の断行等を主張するなど急進化していった。1920年に入ると、第一次大戦後の大不況や原内閣の労働運動抑圧、普選運動の頓挫などを因として社会運動は一層ラディカルとなり、大杉らの唱える労働組合直接行動主義＝サンディカリズムも浸透していく。

一方国内におけるボルシェビズムの力も高まり、堺利彦・山川均らがその中心となり、大杉と分れた荒畑もこれに加わっていった。それでも当初はアナキストとマルクス主義者の共闘の可能性を大杉自身も信じていたように、両者（さらに幅広く左翼全体）の大同団結の試みは、1920年の日本社会主義同盟となって結実する。この同盟には堺・山川・荒畑・大杉ら明治以来の古株の他、黎明会・新人会・建設者同盟・暁民会等の学生・思想団体の活動家、総同盟・信友会・正進会等の労働諸団体のメンバーらが含まれ、マルクス主義者・アナキスト・国家社会主義者など、創立趣意書に謳われた如く「あらゆる態度、あらゆる色彩の社会主義を糾合」するものであった。執行委員の中には、高津正道・北原龍雄・吉川守園・橋浦時雄など後に日本共産党結成に参加する者も少なくないが、むしろ江口渙・岩佐作太郎・近藤憲二・加藤一夫・水沼辰夫・和田久太郎らアナキスト、サンディカリストの方が目立っている。だが社会主義陣営の蜜月とも言うべきこの同盟は、早くも半年後に政府の圧力で解散に追い込まれ、雑多な諸勢力の混成では十分な変革の実効を挙げ得ないことを知らしめる結果となった。

この間大杉は、近藤憲二・村木源次郎・和田久太郎・久板卯之助らと北風会なる研究会を主宰する一方、月刊誌『労働運動』を刊行、革命機運の醸成に努めていた。そこではアナキズム革命の大義が高唱され、労組の自由連合とG. ソレルらのサンディカリズムの戦術論が紹介された。

当然この傾向はマルクシスト側の反発を生み、当初協力的だった堺・山川・荒畑・吉川守園・近藤栄蔵らの離反を招いた。山川はボル派の理論的指導者として『社会主義の進化』、『無産階級の独裁か共産党の独裁か』などの論文で、ボルシェビキ革命の正当性を強説する。ボル派は1922年夏コミンテルンの指導の下、堺・山川・荒畑・高津・橋浦・吉川・徳田球一らを中央委員として秘密裡に日本共産党を創立、山川は機関紙『前衛』に『無産階級運動の方向転換』を書いて、少数の尖鋭分子の突出的行動ではなく、大衆の現実的要求に立脚した運動の重要性を説いた。「革命の翌日を空想して気焰をあげ…検束をうけて、大いに反逆の精神を満足させる

77) 糸屋寿雄、『日本社会主義運動思想史I』、法政大学出版局、281頁。

78) 筑摩書房、『寒村自伝・上』、206頁。

くらいが関の山」<sup>79)</sup>で、資本主義の鉄壁に対し「小指一本もふれておらぬ」<sup>80)</sup>という「刹那の革命的行動」<sup>81)</sup>の限界を批判するのは、サンディカリズムの色彩濃い労働運動の現状を多分に意識したものと思える。「精英な革命の前衛」<sup>82)</sup>が無産大衆の要望を背景に十分な指導力を発揮すること、労農ロシアを積極的に擁護することを主張する山川理論は、アナ・ボル対立の中で、明確にボル派の戦略と展望を指し示したものであった。

他方1921年、ロシア共産党第10回大会でアナキスト・サンディカリストの排撃が決められ、ロシアにおけるアナキスト弾圧の実情が伝えられてくると、大杉らはボルシェビキの無道とネッブの反革命性を糾弾、第二革命の必要を説いてボル派に激しく応酬する姿勢を露わにする。

1922年、教育組合啓明会の下中弥三郎らの提唱で試みられた労組の全国統一戦線（日本労働組合総連合）樹立の構想は、中央集権主義に則って全国的指導権を堅持せんとするボル系の総同盟と、アナキズムの理想に従って中央指導部の官僚的統制を拒否し、各単位組合の自由連合を固執する労働組合同盟との深刻な対立を緩和し得ぬままに、同年9月大阪における総連合創立大会はついに流産に終る。

当時の国際的な政治情勢と第一次大戦後の日本の経済不況の下に…失業や賃下げが労働者階級を圧迫してきた状況の下で…労資の対立が顕著に、また必然の情勢として盛上がっていた現実からすれば、労働組合の全国的協力組織がこの時結成されていたら、局面の展開に力があったのではなかろうかと追想される。<sup>83)</sup>

秋山清はこのように書いているが、仮にそれが可能だったとしても、革命の前衛を自認する日本共産党の権威主義的性向と、あくまで強烈な個人の自我の尊貴をあらゆる活動の基点におこうとする大杉の思念とは、根本的に相容れるものではなかったはずである。国家を国家たらしめる本質の一つを人民への統制の機能に見るなら、これを根源から否認し去らずにおれない大杉のラディカリズムと、過渡期における必要悪として是認する「革命」の論理とは、どこまで行っても交わることはないであろう。大杉を抹殺した天皇制国家の野蠻が潰えた現代でもなお、日本の革新運動の正統を自負する日本共産党やその周辺の人々によって、大杉がほとんど全否定されずにいない訳合もこのあたりに存するのであろう。

79) 筑摩書房、『現代日本思想大系15・社会主義』、335頁。

80) 同前。

81) 同前、334頁。

82) 同前、343頁。

83) 三一書房、『増補日本の反逆思想』、130～131頁。